

my opinion

鳴門教育大学学長

山下 一夫

Kazuo Yamashita



昭和28年(1953年)3月、大阪府生まれ。専門は臨床心理学、生徒指導論。京都大学教育学部助手、鳴門教育大学講師・助教授・教授・副学長・理事を経て現職。徳島県スクールカウンセラーを約10年間兼務。著書に「カウンセリングの知と心」(日本評論社)、「生徒指導の知と心」(日本評論社)など。

平成18年(2006年)7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において、教職大学院制度の創設や教員免許更新制の導入とともに、大学の学部段階の教職課程の改善・充実を図るために、教職実践演習の新設・必修化、教育実習の改善・充実などの方策も提言された。

鳴門教育大学では、学生が客観的なデータに基づいて自己の力を認識し、明確な自己課題をもって教育実習に参加するために、本学の湯口雅史准教授が中心となり、3年生の主免教育実習前に実施するテスト「自己診査」の開発に取り組み、平成26年度から平成30年度まで、第5版を数えるまでになった。

位群と教育実習の成績とに相関が見られる。医学部や薬学部では学生に対し病院実習や実務実習を受講する前にCBT(Computer Based Testing)を実施している。本学では「自己診査」のCBT化を目指している。このCBTは項目反応理論(Item Response Theory)を用いている。

そして、教育実習について大学は「履修に際して満たすべき到達目標をより明確に示すとともに、事前に学生の能力や適性、意欲等を適切に確認することが必要である。教育実習に出さないうような対応や、実習の中止も含め、適切な対応に努めることが必要である。」と記載されている。

このテストで評価する学生の力は、「教員に求められる資質能力(教育人間力、協働力、生徒指導力、授業実践力)」に「社会人基礎力」を加えた5つの力であり、正解を求める知識問題と最適解を求める多面的理解問題とを混在させ、教育に対する幅広い考え方を問おうとしている。テスト結果において、その下

コンピュータがテスト処理を行いながら、受験者の回答状況に応じた能力に適した問題を計算して選択出題する仕組みを取り入れたものであり、通常の試験より適正な能力判断が可能となる。教員養成の質の向上と保証に大いに役立つと期待されるCBTを、一緒に開発しませんか。

教育実習前のCBTを一緒に開発しませんか